

ながい(ながえ)はおそれあり

山内 昌之

その席で観世流宗家の観世清和師と向かい合せになるとは思いもよらなかった。知人の華燭の典が終わりを告げて、もうどういうわけか、賑わいはしばらく続き、席を立つ人がいなくなった。私がふと「長居は恐れあり」とつぶやくと、清和師も莞爾として、「そうですね、長居は恐れあり」とすぐ応じられた。二人はややあって自然に席を離れたのである。

これは「盛久」の結びを踏まえた遣り取りにほかならない。源頼朝に赦免された平家方の武将・主馬判官盛久が男舞を披露し、「長居は恐れあり」と頼朝の前を控えめに辞去する奥ゆかしいクライマックスの詞である。地謡は「心の内ぞゆゆしき」と心理の襞を鮮やかに謡い、節義を重んじる盛久の姿を讃えるのだ。

『盛久』は、江戸時代の將軍はじめ武家方で人気のある能の一つであった。たとえば、將軍職を家光に譲って大御所になった秀忠は、寛永七年(一六三〇)正月二十九日に、或る老臣宅へ御成の際、白楽天や実盛など六曲を楽しんだ後、わざわざ『盛久』を所望して喜多七大夫に舞わせたほどである。三代將軍・家光もしきりに『盛久』を舞わせたことは、徳川幕府の正史たる『徳川実紀』にも出てくる(『大猷院殿御実紀』巻十五)。

しかし、私が清和師の前に臆面もなく『盛久』を引いたのは、秀忠の『盛久』好きに因むことではない。むしろ、秀忠からおよそ二〇〇年後、四品の大名も轅に乗れるのか、隠居した自分には雲の上のことは少しもわからない、と強烈な嫌味を放っている。もともと従五位下老岐守で平戸城主の松浦清こと静山は、五万七〇〇石で柳の間に控え、四万六〇〇〇石の津軽家と同格であった。それなのに、津軽家は蝦夷地警備への貢献から、七万石ついで十萬石に高直しをされ、大広間に移っただけではない。前後して、老中の官職と同じく四品と侍従に上げられた栄遇への諸侯の反感と嫉妬も並ではなかった。

嵯峨源氏の末裔で元寇を戦った勇士の松浦党首領からすれば、平戸・長崎をずっと警備してきた俺たちはどうしてくれるという話なのだ。そのうえ、津軽信順が轅を使うに事欠いて、江戸城から下がる時に常の道順ではなく、わざわざ大川端をこれみよがしに通ったものだからたまらない。ますます多くの大名家を敵に回した。古代ギリシャの詩人ピンダロスは、「時節を得ない自慢は、狂気と共鳴する」と語ったものだ(ブルタルコス『モラリア』7)。まるで津軽の轅自慢を言い当てるかのようだ。自分を誉めるのは恥知らずであり、他人に誉められても恥じらうのがふさわしいと古代ギリシャ人も忠告していたのに、信順の振舞いはまるであべこべであった。

幕府としても放置しておけない。ついに、公許を得ない津軽家の轅使を用を罰して当主の逼塞を命じた。苛烈な処分は身内にも及ぶ。同時に、幕府の徒目付や御小人目付たちも、嚴重に轅の使用ぶりを監視しなかつたことから厳罰を受けたのである。

浅草の津軽家上屋敷や抱屋敷の門扉には、いたずらから男子の陰茎が描かれ、町人らが工夫した落とし穴に津軽侍がはまるのを囃し立てた。松浦静山は、どうして浅草の町人らはこれほど津軽家を嫌うのか分らないとシラをきる。しかし、同じ浅草の鳥越に屋敷を構えて下々の事情にも通じた静山が内情を知らないはずがない。いろいろ流布した落咄しに武家方から出た情報も入っているからだ。ひょっとして静山があれこれ言いふらした可能性もあるのではないか。

津軽の家中が相談して殿様に切腹する以外に手だてがないと言上すると、殿は「切腹したら、また輿に乗らざるまい」と嫌がったという

文政一〇年(一八二七)に起きた津軽家轅事件に関わる逸話をつい思い出してクスリと可笑しくなったからだ。

この年、十一代將軍・家齊は太政大臣になった。異例の生前任官をこまごま各大名は、こぞつて祝賀登城した。そのなかに、十萬石の弘前城主・津軽越中守信順もいた。事件は、信順が通常の武家籠でなく、轅で登城したことからはじまる。轅とは、近世においては、大札儀式のときに使用する板輿のことだ。轅身は溜塗、棒は黒塗であった。兎手は八徳(十徳よりやや品位が下がる胴着)を着て、白布で肩から吊るすのが普通である。正面一方から出入りし、束帯を着た主人は後ろ向きにせずに入ると入るわけだ。もとより公家の乗物から変容発展したものであり、津軽家は縁戚筋の近衛家から贈られた轅を使ったのである。

最近、上梓した『將軍の世紀』(上下、文藝春秋)でも詳しく書いたように、江戸時代の幕府・大名は、彼我の格式にやかましかった。

四品(正従四位)になっても、轅にすぐ乗れるわけではない。御三家・御三卿以外には外様の国主・准国主のなかでも限られた大名だけに許された特権なのだ。国主中の国主である細川家や藤堂家でさえ遠慮して轅を使わないのに、高直しで国主に成り上がった津軽家が轅を使うとは、と多くの大名は憤懣やるかたない。そもそも諸侯は津軽家の立ち回り上手にかねてから反感を抱いていた。江戸末期有数の文化人・松浦静山は、

落ちもある。俗に死者を葬行する道具を輿と呼んだことから、轅を意味する輿にかけたのだらう。逼塞中の殿様が家臣のムシヤムシヤ食べる飴を食してみるとなかなか美味い。また、別の菓子を味わう家臣に「これは何か」と聞くと「おこし」だと答える。すると、「ナニおこし、まっぴら御免だ」と顔をしかめたという笑話もある。「おこし」(御輿)とは、まさに轅を意味する輿にかけたのだ。もっとおかしい話も残っている。当時、流行中の風邪が津軽風と呼ばれたのは、「しそんじると輿に乗る」からであった(『江戸時代落書類聚』中巻)。

それにつけても、松浦静山はしつこく津軽信順の失策をあげつらう。城中で信順の名代として逼塞の命を老中から受けた親類がいる。出羽亀田領主・岩城伊予守隆喜である。彼は、沙汰を信順に伝えて、そそくさと屋敷を辞去しようとした。まあ、そうあわてずに食事でも一緒に、と何度もすすめる信順の誘いを再三固辞した。信順がそのわけを尋ねると、隆喜はすかさず「ながい(ながえ)はおそれあり」とかわしたという話がある(『甲子夜話』6、巻九十六、巻百)。長居は恐れあり、と『盛久』を引き、公儀の怒りに懲りず酒興に誘う信順のたしなみの無さを、判官盛久の心ゆかしい所作で諷めたのだらう。

それにしても、岩城隆喜の遣り取りには能・狂言を武家教養の基礎とした江戸人のゆかしい所作が感じられる。いつもは饒舌な松浦静山も隆喜の「轅はおそれあり」との発言だけを紹介して無駄口をきかない。これは、隆喜こそ盛久のように「心の内ぞゆゆしき、心の内ぞゆゆしき」とひそかに共感できる人物だったからではないか。冒頭で触れた観世清和師の仕草から岩城隆喜の逸話を私が思い出したのも、多弁ならざる武家教養にノスタルジアをおぼえたせいでもあるだろうか。『盛久』が開場四十周年を前に国立能楽堂の三月定例公演(令和五年)に加えられていたのは、その詞章ではないが、まことに「有難し有難し、得難きは時」というほかない。